R5年(2023) 12月10日

報徳博物館 だより

No.7
通算 No.114

ハンサム金次郎シリーズ⑦
東京駅のビル街から神社縁端へ
八重洲ブックセンター店頭の
名物「金色」金次郎像

「かどのの里」売店前広場に移設された佐々井信太郎翁胸像(右)と二宮金次郎像

昭和恐慌のどん底から故郷旧葛野村を救済
佐々井信太郎翁胸像・記念碑の再整備

兵庫県丹波市氷上西小学校にあった佐々井翁の胸像と金次郎像が、平成22年11月旧葛野村役場跡の「かどのの里」売店前広場に移設されました。以下台座背面の顕彰碑文の紹介です。

「文学博士で氷上名誉町民の佐々井信太郎先生は、明治七年当時中野に生まれ、早く父を喪い病母に事えて至孝、苦学力行万難を嘗め、役場書記から小学校教員となり、小田原中学在勤中に二宮尊徳を研究して、神奈川県社会課長となり、東洋大学教授、大日本報徳社副社長、教育審議会委員、一円融合会理事長他の要職を歴任し、尚報徳全集等多くの著書あり。夙に葛野村は耕地整理の借財に苦しみ、人心の荒廃其の極みに達した。昭和九年先生を招き、報徳仕法による経済復興と、報徳の教えによる心田開発の指導を受け、爾来三十年漸く村勢は回復し村民は安堵した。今年先生は九十二才にして勲三等に叙せられ、郷党益々その徳を敬慕し、ここに寿像を鋳て永久に仰望し、其道を実践し、生々発展一円融合其達成を誓うて報恩の一端とする。
昭和四十年十月　葛野報徳自治振興会」(ルビ、句読点は編集部。写真提供：同自治振興会)

昭和初期不況下の村々を報徳式自力更生で活性化

《生い立ちと旧葛野村》

佐々井翁の生誕地葛野村は、今は京都府福知山市の西隣、兵庫県丹波市氷川町西地区になります。水利不便な畑作農業主体の貧村で、そこで父母弟妹との５人暮らしでした。小学５年の時小学校が廃校となり、以後正規の学業を受ける機会もなく、通信教育や雑誌を通じて独学の道を進みます。20才の時父が多大な借財を残して急死。村の書記、小学代用教員の暮らしでは債務返済は覚束ず上京。中等科教員をめざし、合格率５％前後の超難関の検定試験を次々クリアし、明治36年29才で神奈川県立第二(小田原)中学校教諭となり、故郷から家族を迎えました。

最晩年の佐々井翁

《小田原赴任・報徳との出会い》

翁はそこで校長の吉田庫蔵(吉田松陰の甥)の教示で二宮尊徳に出合い、耐乏生活で負債の長期返済を余儀なくされた自身の境遇を『報徳記』に重ね、共感を深めます。以後「二宮尊徳50年祭」や同中学での報徳夏期講習会を通じて、政官財界の報徳人脈との交流を広めます。さらに刊行早々の二宮尊親編『二宮尊徳遺稿』を徹底研究し、従前の解釈や誤謬を是正して尊徳の教義の真髄に迫り、大正５年には『報徳教の根本義』を出版。報徳の視点からの欧州大戦や時局、社会論評など論壇活動にも積極的に乗り出し、注目を集めます。

明治５年最初に得た中等教員免許状

第一次大戦の表層的な好況と物価高騰、労働争議や社会主義運動、やがて米騒動に発展する世情の動揺と不安が深まる中、社会教育用の『二宮先生伝』を神奈川県教育委員会の委嘱で執筆。次いで大正7年神奈川県に請われ通俗教育主事に就任、翌年は貧困者、労働者救済対策用に新設された「社会課」の初代課長に任命されました。そこでは有志拠金による労働者無料宿泊所や浴場、公設市場建設などのほか、社会福祉事業や更生教育に新たな実績を広げました。しかし行政の計画持続性に限界を覚り、大正11年県職を辞任。以後東洋大学教授に、また大日本報徳社では副社長として迎えられ、同社講師陣と共に報徳の教宣活動や不況下の報徳社・農村の自立更生指導に専念します。

《恐慌期の報徳仕法 一土方村(現掛川市)を自力更生のモデルに一》

昭和４年10月ニューヨーク株式大暴落の煽りで世界は経済恐慌へ、翌５年慢性的不況下にあった日本は未曾有のどん底「ルンペン時代」を現出、負債過重の農村は存亡の危機に瀕します。全国町村臨時総会は政府に救済を陳情、閣議は７千万円の融資を決めますが、農村再生の目処は立ちません。この頃内務省から静岡県地方課長に出向した遠山信一郎は、報徳の自力更生論に注目、見本とすべき「特別指導村」の設置を構想し大日本報徳社に協力を要請。翌年同社は理事鷲山恭平を村長とする土方村を推薦します。折しも同社での『二宮尊徳全集』の編纂を通じて報徳原書の実務を会得した佐々井翁は、土方村仕法にそれを適用し実践に臨みます。それは自立への徹底した覚悟を促す「心田開発」に始まります。指導村受け入れの是非を問う約一千名の村民大会で、翁は借財の自力償還を基本に合意形成、一致団結の報徳農村経営再建案につき熱弁約４時間、満場異議なく受容となりました。

昭和15年教宣活動に多忙の頃

それは一村全戸報徳社員とする土方村報徳社を設立、村長を社長とし、神職、僧侶、学校長に各組合、農会、婦人会、青年団他各種団体長らを結集し、あらゆる事項を常会(芋コジ会)で徹底協議、合意形成を図り、困窮者の救済、記名投票に

よる精励者の表彰と無利息報徳金の貸付、負債の低金利への切替え、冠婚葬祭の徹底簡素化、生産性の向上、役員の戸別訪問による問題解決等々で着実に成果をあげました。第一期五カ年計画終了時の昭和11年には多額の村外借財は完済、一戸あたりの生産額は475円から750円に増加、その実績が評価され、農林大臣と静岡県から優良村として表彰されました。

昭和８年第２回「国民生活建直し指導者講習会」開会式（大日本報徳社先聖殿）

仕法着手後間もなく土方村の噂が広まり、全国自治体からの視察・見学者が相次いだため、翁は全国の市町村指導者を対象にした講習会、研修会の開設を着想。大日本報徳社は政府・行政機関の期待も受けて、昭和８年２月１日から45日間に及ぶ第１回「国民生活建直し指導者講習会」を開催します。これは昭和13年6月21日まで計15回に及びましたが、いずれも定員超過の盛況となりました。同12年には長期受講者によって「大日本振興報徳会」が結成され、全国的な報徳活動の盛り上がりをリードし、報徳社の設立も相次ぎます。会長に推された佐々井翁は指導者として、全国の講演指導に益々多忙を極めます。

《窮地・葛野村の救済》

翁の生誕地葛野村も不況下で深刻な事態にありました。足立樋太郎村長は昭和９年２月からの第３回講習会を受講し、終了間近に佐々井翁に崩壊寸前の村の実情を訴え救済を懇願します。

畑作貧村の葛野村は、大正12年から宿願の水田化耕地整理事業を推進、地下揚水ポンプや溜池、用水路などの整備に取り組み、一時は模範村として評判になりました。しかし大恐慌で一転、開発費は莫大な負債となり、田畑山林の売却、銀行差押え、農民逃亡が相次ぎ村は惨状となり、村民の心は荒廃しました。

昭和40年頃の旧葛野村を含む氷上町航空写真、水田化達成後の姿。『氷上町誌』（昭和40年刊）より。

１ヶ月後、葛野小学校講堂で「報徳式経済講習会」が開催され、午前は男子、午後は女子に分け計八百余名の村民に対し、翁は土方村同様借金償還に始まる村ぐるみ報徳仕法の自力更生を説きます。報徳社体制のもと常会での討議合意形成を徹底し、幹部の指導力向上、生活の改善、農協による戸別負債の肩代り処理にあたり、その後も度々現地を訪れ、農産物、木材、繭の一括取引で収益増進に導きます。３年後、当初５万円に過ぎなかった農協の村民預金高総額は25万円となり当面の危機は回避、昭和18年には借財償還を早めて自立達成に至ります。戦後の復興期も含めると現地指導は18回に及び、昭和42年には水田は250ヘクタール、農協の資産は４億７千万円余、林業は加工材の生産を実現、新開発の園芸地30ヘクタールでは草花、花木、庭木などでも大きな増収、村民の自立再建への努力は堅実な成果を上げました。

昭和30年町村合併で葛野村は氷上町の西地区となりましたが、報徳社は葛野報徳協同組合、葛野報徳自治振興会として活動を継承、昭和40年には翁の叙勲を記念し、その功績を讃えて氷上町西小学校に翁の寿蔵と金次郎像を設置しました。

翁は全国講演行脚においても、機会あるごとに膝詰めで地元の生活者の相談に乗り、対等の視線で問題を捉え、実態に即した解決策を考え励ましました。その姿勢は接する人々に慈父のような親和感を抱かせたようです。なお、長らく葛野の有志のお世話で存続した佐々井家墓地は、2021年に関係者参列のもとに墓終い祭祀をもって整理。現在は小田原市の久野霊園に墓地が整備されています。また現今の葛野については、元丹波市教育長岸田隆博氏にご教示をいただきました。

ハンサム金次郎シリーズ⑦　八重洲ブックセンター前の金次郎像が小田原へ

東京駅ほど近く大書店八重洲ブックセンター（以下BC）の店頭で馴染まれてきた金次郎像が、2023年2月17日、店員たちの見送りを受けて小田原報徳二宮神社に移送され、境内中段水屋の奥「金次郎カフェ」脇の緑陰に安置されました。象高150cm、台座35cm、富山県高岡市の竹中製作所製、同地の銅器彫像家般若純一郎の作品です。

金次郎像前・カフェで寛ぐ人々　　ラテアート

八重洲BCは、鹿島建設鹿島守之助（外交官、参議院議員歴任）会長の肝煎りで、鹿島出版会の傘下で1978年に設立されて話題になった超大型書店です。河相全次郎初代社長は、1991年本駒込吉祥寺に故鹿島会長の墓参をした時、向い側の「二宮尊徳先生菩提塔（二宮家墓地）」内の石像負薪読書金次郎像が目に止まりました。店頭にはこれが相応しいと、高岡の有志から本像を譲り受けたそうです。台座銘板には「勤勉にして片時も本を手離さなかった二宮金次郎こそ真に理想の読書人である」とあります。同年の6月24日に神社が入魂お祓いの儀を出張催行、その縁で23年後、ビル再開発計画で一時休業を余儀なくされた八重洲BC（現在は東版経営）から、寄贈を受ける運びとになりました。

金色像は1997年頃の書店イベント「願掛け金次郎」金箔貼りで一変したものです。尊徳は勤勉自助共助を奨励しましたが、廃れた神社仏閣の祭礼を復活するなど庶民の娯楽にも深い理解がありました。金色金次郎像は今、神社の木立の陰で参拝客とカフェタイムを共にしています。

書店の金次郎入魂のお祓い（左）と願掛け金箔貼りのイベント（右）の記念テレカ

博物館留学研究生紹介

于秋芳さん

南京郵電大学准教授

『報徳記』を手にして

これまでも数名の現役教授、准教授、講師諸氏が博物館に留学しました。于秋芳さんもその一人、2019（平成31）年3月14日から9月12日までの約半年間、協同組合や日本の民間金融が研究テーマでした。2014年清華大学での国際二宮尊徳思想学会に参加し、報徳に興味を持ち当博物館へ。成果として、『報徳学』17号に「二宮尊徳による中国古典『大学』の引用と受要」と題する論考が掲載されています。博物館の講座《中国を知ろう会》では「南京の観光地と料理について」「中国人の日本語習得について」「中国人の親戚付き合いについて」など4回にわたり講師を担当されました。

限られた時間で見聞にも意欲的、古都金沢や名所松島も巡り、歌舞伎鑑賞も。小田原では北条五代祭りや田植え祭り、七夕祭り、花火大会、外郎（ういろう）売り口上大会、そして報徳二宮神社での花祭り他様々な行事にも参加、日本料理やお茶の稽古も体験し、充実した日々を過ごされました。

和服姿で茶の湯も体験

心に残っているのは、博物館での日々の暮らし。朝出勤をして館員の皆さんと館内や周辺のお掃除をした後、お茶をいただきながら和気藹々のお喋り。楽しい安らぎのひと時だったそうです。

発行　公益財団法人報徳福運社
報徳博物館
〒250－0013　小田原市南町1－5－72
電話0465(23)1151・振替00230-6-49044